

## 背景

全国各地で人里でのクマによる被害や目撃が相次いでいますが、令和7年のクマによる死者数は過去最多となっており、政府は「クマ被害対策等に関する関係閣僚会議」を開催し、国民の命と暮らしを守り、安全・安心を取り戻すため「クマ対策パッケージ」により実効性の高い対策を着実に実行するとしています。

このような事態に至った背景を、狩猟歴26年の経験を踏まえて考察しました。

## ヒグマの習性（研究者等の知見）

- ・ ヒグマの嗅覚は犬の6～8倍と言われている程、非常に鼻が利きます。
- ・ 執着心が強い動物で、特に餌に対して行動がエスカレートします。
- ・ 学習能力が高く、経験によって行動がたやすく変容してしまいます。
- ・ 子グマは母グマから様々なことを学びます。
- ・ 1990年に春グマ駆除が廃止され、北海道によると1990年にはヒグマは推定5,300頭でしたが、2022年には推定12,200頭にまで増えたとされています。



推定300kgの巨大ヒグマを駆除



巨大ヒグマの前足の幅は16cm

## 過去との違い

- ・ ヒグマの餌となる「どんぐり」の豊作凶作が話題となりますが、長年ヒグマの胃や糞からどんぐりを見たのは15年も前で、それ以降は確認していません。有害鳥獣駆除の対象となるヒグマは人里に出没しているため当然ですが、そうした個体の餌は山の中のどんぐりではなく、「(デント・スイート)コーン」「麦」「コクワ・山ぶどう」「サケ」で、季節や地域の栽培している農作物によって餌が変わります。それは胃の中や糞で判断できます。【山林のみを生息地としている個体との二極化】
- ・ ヒグマからすると、毎年同じ場所や時期に餌がある(畑、家庭菜園、生ごみ等)ことを学習していて、そこを離れるわけではないでしょう。山の中を無いかもしれないどんぐりを探し回って体力を消耗することもないうえに、大量にある畑はヒグマ同士の争いも回避できます。
- ・ そのことから、どんぐりが豊作であったとしても、おいしい餌場に現れることは無くならないでしょう。
- ・ 子グマは母グマからこれらのことを学習し成長していき、怖くはない人間の生活圏にある餌を求めて出没しています。



デントコーンを食べた後の糞



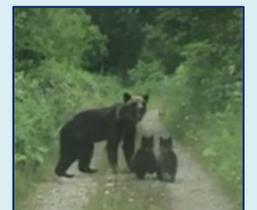
コーン畑を食い荒らした跡



山ぶどうを食べた後の糞

## 考察

- ・ 通常、母グマが連れてくる子グマは1～2頭でしたが、5年程前から3～4頭を連れてくる母グマが多くなっています。5頭の子グマを連れてくる母グマを1度だけ見たことがあります。(別の母グマから離れた子グマを連れてくる可能性もあり)そうした栄養状態が格段に良好となっていることで、出産後間もなく死に至る頭数が減少し、生存率が高まり母グマが連れてくる子グマの数が増えていると感じています。
- ・ ヒグマにとってコーン畑は、大量に確実にある餌場となっていて、背丈が高いため身を隠すのにも適しています。ハンターも見通しが悪いため銃は使用できません。
- ・ 餌に執着すると、電気柵があっても土を掘って畑に入り込むことがあります。
- ・ これらのことから、出没しているヒグマが山林のどんぐり等の豊作によって減少するとは考えにくいと感じています。



ヒグマの親子

電気柵の下から侵入した跡



電気柵掘り跡

## 今後

ヒグマは、春グマ駆除廃止から35年で人間は怖い生き物ではなくなり、効率よく、しかもおいしい餌場を見つけその生息数を増やしてきました。長い年月を費やして形作られた行動は単純に変えることはできませんので、有害駆除だけではなく、個体数管理を着実に進めると同時にハンターの育成も重要です。

問合せ先 : h\_kamikawahokubu@maff. go. jp